

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00015

研究課題名（和文）余暇学に対するアリストテレスのスコレー概念の寄与について

研究課題名（英文）Contribution of Aristotle's concept of scholē to the philosophy of leisure

研究代表者

齊藤 和也（Saito, Kazunari）

香川大学・経済学部・名誉教授

研究者番号：20153794

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 400,000円

研究成果の概要（和文）：社会生活に占めるレジャーの比重が高まり、労働と並んでレジャーが人生の意味に大きく関わるようになった。アリストテレスの閑暇（スコレー）の概念にまでさかのぼってレジャーの哲学を構築する必要がある。アリストテレスは、閑暇の生において人間の最高の活動が実現されるとする。そこでは、神聖なものを対象とする哲学的観想をはじめとして、様々な理論的及び実践的な研究活動が行われると共に、様々な文化的活動が展開される。現代のレジャー哲学においては、人生の拠り所となるレジャー活動を見つけ出すことが各人の課題であるとされる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

欧米圏のレジャー研究は、レジャーに関わる諸概念の反省の時期に差し掛かっているが、わが国ではいまだ基本的な概念研究が進んでいない。レジャー活動が商業主義に取り込まれないようにするためにも、いたずらに活動の量を追い求めるのではなく、その質を高めることに努めなければならない。それには我々ひとりひとりが自らの人生におけるレジャーの意味を問う必要がある。そしてまた、レジャーとの関わりにおいて、不断に自らの人生を問い直し再構築していく必要がある。本研究は労働倫理に代わる新しい社会倫理の必要性を訴えるものである。

研究成果の概要（英文）：While the relative importance of leisure in social life is rising, leisure as well as labour take part in the meaning of life. Now we need to construct a philosophy of leisure going back to the concept of leisure in Aristotle. Aristotle claims that the best activities of men are realized in scholē. Here people would participate in various kinds of theoretical and practical studies and various kinds of cultural activities. In the contemporary philosophy of leisure, there is some opinion which claims that it is our own task to find out the leisure activities which constitute the ground of our own life.

研究分野：古代ギリシア哲学

キーワード：アリストテレス スコレー レジャー

1. 研究開始当初の背景

何ものにも束縛されることのない人生を送ることは誰しもが願うことであるが、依然として人々は仕事や社会的義務に縛られて生きている。また、仕事の疲れを癒すはずのレジャーが逆に忙しさと疲れをもたらすという昨今のレジャー事情も看過できない。わが国では余暇の価値に関する社会的意識がそれほど高くはなく余暇研究も欧米に比べて立ち遅れている。欧米の余暇論の蓄積を吸収して余暇思想を構築する必要がある。余暇（閑暇）の思想の源流は古代ギリシアにあり、その概念化はアリストテレスに始まる。アリストテレスの閑暇（スコレー）の概念とその人生における位置づけは、現代においても学ぶべきところがあると思われる。

2. 研究の目的

第三次産業の中でもレジャー産業が飛躍的に発展し消費経済を支える一つの柱になっている。この傾向は増大していくであろう。多くの人々は目先の面白さを追求するあまり、往々にしてレジャー産業に取り込まれレジャーの自由を見失っている。面白さだけがレジャー活動の目的ではないと思われる。束縛から自由な時間をどのように過ごすべきかというレジャーの質に関わる問題を立てることが重要である。そのためにはレジャーの概念を再検討する必要がある。レジャー活動が消費経済に取り込まれている現状の批判だけに終始してはならない。人生に占めるレジャーの意味と役割を明らかにする必要がある。

3. 研究の方法

まず、アリストテレスのスコレー概念について検討する。『ニコマコス倫理学』第10巻では、閑暇における哲学的観想が究極の幸福であり、徳に基づく公共的实践は第二の幸福であるとされるが、『政治学』第7-8巻では観想への明示的な言及がなく、そのことから、哲学的観想ではなく公共的实践こそがスコレーの内実であるとする解釈も生じる。この対立を調停する解釈を試みる。また、現代社会におけるレジャーの意味を追求するレジャー哲学を検討して、アリストテレスの閑暇の概念がどの程度援用可能なのか考察する。

4. 研究成果

第二次世界大戦後、トマス主義者ヨセフ・ピーパーは、知識人の知的活動でさえ精神的な労働とみなされる「労働の神聖化」に警鐘を鳴らし、カトリック的な立場から近代の労働倫理を批判した。閑暇はたんなる自由時間や休暇などの外的事実ではなく、内面的な休息やゆとりであり、存在するものに対して心を開き沈黙のうちにこれを受け入れる精神的な態度である。創造された世界を心の眼で眺め善いものだと肯定するコンテンプラチオ（観想）が閑暇の本質であり、それは礼拝という祝祭的行為を通じて内側から人々に根源的な力を与える。閑暇は労働に束縛されている人々を解放し彼らが生命の根源に到達することを可能にする。このような閑暇の思想が西洋文化の根底にある。ピーパーは、閑暇におけるテオリアー（哲学的観想）を最高の幸福とするアリストテレスに依拠している。アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』第10巻の幸福論において、閑暇における理論理性（知恵）の活動（哲学的観想）が終極の幸福であり、実践理性に基づく徳の現実活動（公共的实践）は第二の幸福であるとした。ここで哲学的観想（テオリアー）とは世界の運動と存在の原理に関する理論的認識を意味している。しかし、『政治学』第7-8巻においては、閑暇における市民の活動が哲学的観想であることが明示されておらず、ここから、ある論者は、アーレントに依拠して、公共的实践こそがアリストテレスの閑暇の生の内実をなすとした。解釈上のこのような対立は調停可能だろ

うか。

アリストテレスによれば、人間の生は、戦争と平和、忙事と閑暇に分けられ、戦争は平和のために、忙事は閑暇のためにある。彼の念頭にある市民像は、自らはポリスの構成員として政務に携わり有事には勇敢に戦う人である。彼らは平時には家政の管理を執事の奴隷に任せて「自らは政治的な行為や哲学を行う」。そして、平和な閑暇の時を過ごすために彼らに必要とされるのは、倫理的徳（節制と正義）と「哲学」である。この「哲学」とは具体的には何を意味しているのか。これを観想能力と捉え、『ニコマコス倫理学』との整合性を図る解釈があるが、これに対しては、理想国の市民全員が哲学的観想を遂行できるわけではないので、アリストテレスのスコレー論はごく少数の人間にしか妥当しないという問題点が指摘されている。F.ゾルムゼンは、「哲学」は音楽的教養を含む広い概念であると解釈し、理想国の市民は音楽を聴くことにより感情的な安定を得て倫理的な性状を改善するとした。しかし、音楽は勇気や節制を強化することはできても、理想国の市民に必要とされる実践理性（思慮）を養うものではない。一方で、節制や正義が真の徳であるためには思慮が不可欠であることを理由に、「哲学」を思慮と解釈する学者もいる。しかし、これを思慮に限定してしまうと、逆に、最も完全な幸福が哲学的観想であるという『ニコマコス倫理学』の論点とのつながりが切れてしまう。では、これらを調停する解釈は可能だろうか。まず、アリストテレスが「知恵に基づく観想」とそこに至る「知の探究過程」とを区別していることに注目する必要がある。知を備えている者の方が知を求める者たちよりもより快い時を過ごすと言われる。観想活動は知恵の現実活動態（知識体系の現前化状態）であって、具体的には、『形而上学』の体系を実際に遂行した結果、到達する境地である。この遂行過程は人間の自然本性に埋め込まれている「知への欲求」の自由な展開である。それは、感覚から始まり経験や技術へと進展していくものであって、一足とびに知恵の獲得とその現実活動態に至るものではない。『形而上学』は感覚的な自然的世界の解明を踏まえた上で、それに続いてその世界の原理を探っていく過程である。この過程自身が哲学の活動である。観想（テオーリアー）の対象は神的なものに限られることはなく、様々なレベルにおいて対象を直に見ることもテオーリアーと言われる。ある事象を知るとは、その事象の掘って立つ原因を探し求めて見つけ出し、その原因をしっかりと精神の眼で見ることである。哲学は知を愛し求める過程すなわち事象の原因を探し求める過程であって、知ることを欲する人であれば誰にでも開かれている。哲学は驚きから始まる。自分の考えに反する事実が提示されたとき、人は驚き、認識論的不整合を解消しようとする。哲学はこのような驚きの問いとその解決の努力とからなる過程である。適切な問いに導かれるならば、このような探究はすべての人に開かれている。アリストテレスによれば、世界は、すべての存在の第一原理である神を頂点として、下位の存在が上位の存在のためにあるという階層的秩序をなしている。知識もまた存在の秩序に対応して階層的構造を持つ。階層的構造は差別の原理でもあるが、知識の段階的な向上の可能性を示すものでもある。理想国の市民は、神的存在の哲学的観想を最終目標として様々なレベルにおける哲学の探究に参加すると考えられる。このような探究者の集まりもスコレー（研究会）と呼ばれる。

理論的な知識の探究がすべての市民に開かれているとしても、思慮はどうか。アリストテレスは、倫理学と政治学を「人間の事柄に関する哲学」と呼ぶ。また、教育や音楽に関して哲学する人々がいると語る。理想国の市民は理論的のみならず実践的な事柄についても必要に応じて哲学的探究を行うと考えられる。また、倫理学は行為に関わる価値観の根拠を解明するものであるが、若者はこのような学問を学ぶことによって実践的な思考力を養い思慮を獲得する。このように、『政治学』第7巻において、閑暇の徳として挙げられた「哲学」は、理論的領域ばかりではなく実践的領域をも含めた広い意味での哲学的な探究力であると解釈することによって、上述の解釈上の対立は解消される。

閑暇の生には、広い意味での哲学の他に、音楽や演劇などが含まれる。ゾルムゼンは、閑暇における音楽の役割を一般市民の倫理的な改善のレベルに留めた。しかし、アリストテレスは、音楽の享受は閑暇の生を

美しく過ごすためにも必要だと主張している。また、音楽教育は倫理的教育に留まらず、ある種の知的教育にも役立つ。音楽はリズムと旋律によって感情を陶冶するが、ミーメシスとしての音楽は知的能力を養う。ミーメシスは模倣対象の立場に立つことを要するが、この心的操作は推論を働かせることになる。これは自他の感情を理解する力を養うものである。このようにして、音楽は社交世界や道徳世界の基礎感情を形作る。さらに、若者は英雄が何を目標として勇敢にたたかったかを共感によって学び、長じて、その目的（美しいもの）を思考によって理解する。言葉を媒介にしてその行為を論ずることは批評の世界を形成することになる。批評的な文化の世界こそ、我々が作り上げるべき世界である。

アリストテレスにおいては、個人の私的な哲学的観想と並んで、ポリスの公共的な活動も閑暇の生を構成する。代表的なものは人々と共に音楽を通して共歓の時を過ごすことであるが、そのほかにも、ポリス挙げての真剣な神事や神々に奉納される競技や競演がある。これらは、哲学的観想と同じく、「美しくかつ神聖なもの」に与る。神聖なものへの関わりは私的にも公的にも閑暇における人間の最高の活動である。これは、現代のレジャー哲学の一つの到達点につながる。J. Bauwer と M. van Leeuwen (*Philosophy of Leisure : Foundation of the Good Life*, 2017) は、ポストモダンの液状化社会におけるレジャーのあり方を問題にする。彼らは、積み重ねたレジャー体験を物語化することによって自己同一性を獲得し自己を創造的に更新していく人間像を基本に据える。経験経済という研究領域が存在することに示されているように、人々は心に残る経験をレジャー活動に求めている。しかし、彼らは、心に残ることだけではなく、それ以上に、すべての経験を意味のある仕方で包摂することを求めている。また、極限スポーツやスピリチュアルな登山体験に人生を懸ける人々に見られるように、ある特定のレジャー活動に奉仕的に従事しその活動自体を神聖視する人々がいる。彼らは、自分たちにとって重要である、或る超越的なものを体験することによって真の自己変容を経験する。このことに象徴されるように、レジャー活動はかつての労働倫理に代わって善き人生を生きることの本質的な部分になり始めている。善き人生を生きるとは、自らの生の中に隠されている重要なものをあらわにすることであり、このことは人間の最良状態としての幸福を人生の目的として意識することである。そのためには、レクリエーションに見られる快樂主義的な幸福概念ではなく、ギリシア的なエウダイモニアとしての幸福概念が必要になる。人間的繁栄と卓越性が完全な人間になるための中心的概念であり、そうした人間になるためには「自己への気遣い」を中核とした「生の技法」が不可欠である。我々は社会的区分が曖昧な液状化した社会の中で個として生きざるを得ない。レジャー活動は、他者との関わりの中で自己の身体的・心理的・社会的な良好状態を探るためのツールであり、また解釈学的実践を通して自己の良好状態を高めていく自己統治の能力を養う場でもある。人生の目的としての幸福がレジャー活動を通じて実現されるという考え方は、現代のレジャー哲学がアリストテレスのスコレー概念に求めるものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 斉藤和也	4. 巻 94-4
2. 論文標題 レジャーの哲学について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 香川大学経済論叢	6. 最初と最後の頁 117-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 斉藤和也	4. 巻 92-3
2. 論文標題 閑暇における共歓	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 香川大学経済論叢	6. 最初と最後の頁 31 - 48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

寄稿論文 斉藤和也「余暇と哲学」、『石川徹先生退職記念誌 哲学的エッセイ集』2022年3月、58～69頁。
--

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------